第21回国際日本文学研究集会研究発表（1997.11.13）

『吉里吉里人』における国家形成と主体性の喪失

THE CONSTRUCTION OF A NATION IN INOUE HISASHI'S *KIRIKIRIJIN* AND THE LOSS OF IDENTITY

Christopher A. ROBINS＊

At the opening of Inoue Hisashi's novel *Kirikirijin* ("The Kirikirians" Shinchosha 1981), a village in the north-eastern region of Tohoku is attempting to secede from Japan and form an independent state. Once this aim has been accomplished, it takes a mere two days for the newly-formed nation of Kirikiri to collapse. However, within this short period, Inoue depicts a host of characters and locations and poses many provocative questions concerning the processes through which the present Japanese state was formed.

The concept of the "nation" (kokka) is a fairly recent one. In his essay "When is a Nation?", Walker Conner warns that "claims that a particular nation existed prior to late nineteenth century should be treated cautiously." The establishment of many nations in the 19th century was inextricably

---

＊クリストファー A. ロビンズ　バーモント州立大学卒業。インディアナ大学東アジア文化言語学部日本文学修士課程修了。現在同大学博士課程、東北大学大学院文学研究科研究生として在学中。研究分野は、井上ひさし。修士論文 [*Gesaku, Served-up Edo-style: Inoue Hisashi's "Handcuffed Double-suicide"*]。口頭発表に [*Natsume Soseki and the Political Unconscious*], [*Challenging the Japanese National Narrative: Inoue Hisashi and the Reawakening of Regional Identity*] がある。

linked with Western Imperialism and global commercial wars. The formation of nations in relatively undeveloped regions was largely due to the increase in national awareness which accompanied resistance against powerful neighbors, or separatist moves to achieve independence from colonialism. The nation of Kirikiri is an example of the latter. Of course, the village of Kirikiri was not a colony as such, but the Kirikirians symbolically regard themselves as a people under foreign rule, and develop a national identity in opposition to the ruling state : Japan.

I would like to examine the problems raised by Inoue with respect to the historical formation of the Japanese nation and to earlier colonialism, while concentrating on the main characters in the novel. For instance, the protagonist, Furuhashi Kenji, who acts as a mediator between Japan and Kirikiri, is described as "a model specimen of the middle-aged man." He is thus a typical representative of the modern Japanese. Furuhashi is infatuated with Ave Maria, a beautiful girl who is the symbol of the new nation of Kirikiri. Her physical beauty contrasts sharply with the pitiful figure of the middle-aged Furuhashi. Yet these two characters represent an important aspect of the process of national formation, namely the tendency toward loss of identity. In other words, Ave Maria, who represents the essence of the new national awareness, exists only as an official symbol of the Kirikirians, and her own individual identity is not depicted. Symbolically, she is portrayed as a mere object of display. Alternatively, though Furuhashi gradually becomes a central representative figure of Kirikiri, ultimately he too loses his identity.

While explaining this tendency, I intend to consider the formation of nation and national awareness in "The Kirikirians" and the relation of this to the subsequent loss of individual identity.

一九八一年に井上ひさしが『吉里吉里人』を書き下ろしてから、旧ソ連が滅びるなど、全世界の政治事情もかなり変わってきた。それにもかかわらず、国家形成と国家意識という大きなテーマは問題点として、更に注目されるべきものになっている。今回の発表では、この小説に描かれた吉里吉里国の分離独立運動と主人公の行動を比喩的に読みながら、新国家の形成過程の典型的な二元性を考えて見たい。この二元性とは、大ざっぱにいえば、新国家が一方で未来に向けて新たな国家の本質を求めながら、他方、それとは反対に、過去、あるいは外部との差異の意識を支える伝統的文化の方へ向かうという在り方である。吉里吉里国のような独立したばかり国家の場合には、その対立的な二元性の中で、過去に向かう、文化の起源への郷愁のうちに母国の本質が残存しているのである。そしてこの国家意識の中の否定的な本質を克服するため、吉里吉里国は極端に全く新しい国家像を求めるのであるが、しかしその中で国民の主体性、あるいは国家の中心を失って行くことになる。この発表では、そのプロセスを論じるつもりである。更に、『吉里吉里人』に描写された主人公の母からの自立の過程も、国家形成過程のパラドックスとの比喩的な類似性において考えてみることにしたい。

先に示唆したように、『吉里吉里人』には二つの平行的な話の流れがある。第一の中心的な物語は吉里吉里村という宮城県北部にある寒村の日本からの分離独立運動である。第二の物語は主人公の三文小説家古橋健二の母からの独立過程である。古橋の場合には、母親から自立しようとして、完全には自立できないままに五十才を越えているが、吉里吉里国は国家形成から崩壊するまで、わずか二日間しか経っていない。しかしながら、『吉里吉里人』という作品の中で両者の運命が結局絡み合うことになる。

趣向として、『吉里吉里人』の仕組は江戸時代の寛政の改革の前期（一七九〇年ごろ）に出た山東京伝や恋川春町らの風刺的な政治批判戯作に著しく類似しているようである。というのは、現実の政治情況や社会構造や人間関係の有様までが逆さまに描かれているからである。例えば、日本の政治家と違って、

吉里吉里政府の代表者、「愚人会議」のメンバーは、エリートの資格は全くなくて、逆に、一種の精神障害者、あるいは、身体障害者である。吉里吉里国の社会にも日本の縦社会の構造が逆さまの形で映し出されている。吉里吉里の警官や官僚は主に青年である。吉里吉里大学も吉里吉里国立中学校の付属である。この上下を転倒する仕組は吉里吉里人の名前にまで及んでおり、吉里吉里国では、名字の前に名前を呼ぶのである。パロディは一種の剽窃であるように、吉里吉里国の社会構造などはあくまでも母国日本と緊密な系統関係にあることも見逃せないであろう。

吉里吉里国の国民の政治意識を窺って見れば、日本の民族主義的国家意識と様々な共通点をもっている。よく考えれば、吉里吉里国民の政治意識は個人と個人の間に出来上がった政治的な契約というような形としてよりも、一人一人の政治意志がはっきり表現されないまま、地方の共同体や共通語、あるいは、単一風土を基礎にしているといえよう。要するに、吉里吉里人の共同体意識は、土着的な行動様式や言葉を既に身につけていることによって、日本とは異なる本質をもった共同体として確認されるものである。吉里吉里国立中学校付属大学外国語学部日本語学科教授ユーイチ小松の次のような言葉に、母国の中央に対する異質な主体性が明確に示されている。

> わたしたちの言葉でものを考え、仕事をし、生きていきたい。わたしたちがこの地で百姓として生きるかぎり、吉里吉里語はわたしたちの皮膚であり、肉であり、血であり、骨であり、つまりはわたしたち自身なのだ。わたしたちがわたしたちの言葉でものを考えはじめるとき、中央の指図とはまっこうからぶつかる。①

小松先生の「わたしたちの言葉」という表現を「我々の言葉」あるいは、「我々の国」に置きかえてみるならば、どのような発想が浮かんでくるだろうか。このような共同的な価値観に基づく政治思想とは、ただ「場所柄」に応じ

て、「それぞれ多少とも閉鎖的な『部落』を形成」[②]するものに他ならない。これは、丸山真男の日本の近代化の社会・政治組織に対する指摘だったが、吉里吉里人の政治意識にも十分に当てはめられるではないか。つまり、吉里吉里国と日本は両方ともに民族主義の政治意識が深い根を下ろしている。精神的に、両者の政治的観点は百姓一揆の政治意識と顕著な類似性が見られる。ナショナリズム論の学者、パルタ・チャタージェーは、百姓一揆の政治意識について、こう述べている。

> 成員たちを互いに繋ぎ止める団結の絆があらかじめ存在していると信じられているために、個々人は、党派のなかで行動を方向づけられる。党派的な行動は個人間の契約を元に生じるのではなくて、共同体の一員であることから引き出されているのである。[③]

一般に子供は成長する段階で親から自立したがるものである。同様に、新国家の母国からの独立運動が発生するまでには、母国に圧迫されたり、騙されたり、裏切られたりすることによって、母国とは異なるアイデンティティが高まって、人々の心の中に母国に対するかなり極端な反抗意識を持たなければならない。吉里吉里国の場合には、吉里吉里人が日本の近代化の渦に犠牲者として巻き込まれて、一人一人がいろいろな肉体的あるいは心理的な欠陥を持っている。吉里吉里国愚人会議のメンバーは母国から最もそういうような被害を受けた人物たちである。例えば、「オトマツ針生　六十五歳。二十年ばかり前、出稼ぎに上京。オリンピックスタジアム建設工事に一土工として参加。巻き上げ機から落下してきた鉄片で顔の真ん中を縦一文字に切り裂かれた。」他のメンバーも、出稼ぎ中に「右脚切断」とか「鉄材と共に倒れ両脚を失った」とか「水晶の破片が眼に刺って失明」しており、[④] 一人残らず、自分の身体に過去の辛い歴史の消えることのない記憶を刻み込まれている。こういう痛みを通して刻印された記憶は一生かかっても、忘却されることはない。国家形成過程では、

しばしば、国民の一人一人の心に共同体意識を持たすために、「記憶術」あるいは「記憶構築術」[5]が新国家の社会の様々なレベルで行われる。吉里吉里人の場合には母国日本の国民であったことの記憶が深く刻み込まれている。それゆえ吉里吉里人は、日本の国家形成過程が与えた記憶を忘却するため、または、自分自身の心に生じた欠落を補うように、母国との縁を切らなければならないわけである。

第二の物語に戻ると、古橋の母からの自立過程にも、また「記憶術」と「苦痛」という表裏関係のものが重要な役割を果たしている。古橋の場合には、彼が四歳の時に自分の母の働くマッチ工場で次のような場面を目撃してしまう。

> 母親がひとりの男に組み敷かれているのを見つけた。近寄ってみるとそいつは燐寸工場の経営者の弟の禿おやじで、彼に押されながら古橋の母親は、「死ぬ、死ぬ」と呻き泣いているようだった。古橋は咄嗟に母親の危機を救わなければならぬと考えた。[6]

その時点まで古橋は自分の母を性的な女として全く認識してはいなかったであろうが、それ以来、母の神聖な本質が汚され、自分のみが所有する明白な存在ではなくなったと意識されたといえよう。自分の心の中で大事にされた母の神聖なイメージを失った代償として、その大きな欠損を補うために、古橋は目撃したことを忘却しなければならないのである。この古橋の場合と同様に国家の場合も、「神の母」という本質を当てはめると、同じような心理的な反応が生じることが指摘されている。

> 「国体の本義」制作者であった紀平正美は、「日本が一度も戦に敗けたことがない」と述べ、日本の処女性を誇ったがそれゆえに敗戦は「処女の母」「神の母」であると同時に「創造主を産む」女性の強姦と主観され、敗戦を肯じえない人びとによって忘却という事実化を受け取るのである。[7]

若い古橋にとって、自分と母の間に切れ目が出来ることによって、それまでに形成されていた主体性が急に失われたのである。その顕著な現われが、古橋が四歳の時の健忘症であり、なかんずく、古橋は自らのアイデンティティを支えるはずの名前を忘れてしまうのである。そのような状態であったために、幼い健二は公教育を受けられなかった。ある意味で、彼は国家の有益な一人前のメンバーに成れないわけである。国民の記憶を一律に強固にすることは、現代国家の不可欠な条件である。エリザベス・グロズの解釈によれば、ニーチェの哲学では「社会構造を作るためには、記憶の確立は重要な鍵である」[8]と論じられている。『吉里吉里人』の話の中の学者による記憶増進剤の研究も、はっきり記憶と国家形成、あるいは、帝国主義との相互関係を示している。この先生は記憶増進剤を発明するため、古橋を実験台に使うのだが、その目的は、

> 皇国日本の兵士でありながら、軍人勅諭を完全に暗誦できない者が居るのはまことに遺憾である。こういう兵士に記憶増進剤を服用せしめて、軍人勅諭を脳味噌のすみずみにまでしみこませ、もって皇軍の充実を計る。[9]

ということなのであった。古橋は山形の山間部にある小さな村から東京に移り住むことになるが、健忘症は治らないまま自分で生計を立てることになる。あるラーメン屋で出前として働き始めるが、彼の暗記力は余りに弱くて、なかなか仕事は進まないのである。そんなある日、偶然に「痛みと共に憶える、忍者の不忘の術」を耳にする。この記憶術はラーメン屋の主人なりおかみさんなりに出前先を言ってもらいながら身体のある所に切り傷をつけ、その痛みと傷痕と共に記憶するというものであった。この行動は新しい社会人としての象徴的な入門儀式である。古橋が自分の体中に傷をつけたことは、笑いを誘うと共に、他方で残酷にも感じられるイメージである。ニーチェが洞察しているように、記憶を確定するために、痛みは枢要な働きを持つ。

加えられた痛みの程度は、記憶の欠乏の度合を示す。記憶力が悪くなればなるほど、より一層身体に刻みつけるのが残酷になる。[10]

古橋は体中に記憶の傷を刻みつけることで、一種の主体性を持つのだといえるが、その果てに、ラーメン屋の奥さんに誘惑される。そしてその現場を奥さんの子に見られ、古橋は二十七年前に見た禿げおやじと全く同じ立場に置かれるのである。その時から古橋は健忘症から急に記憶増進症にかかってしまう。その現象は何を意味しているであろうか？　それはおそらく、古橋が母から自立し始めたことを意味していよう。古橋における「記憶」の喪失から増進へという形であらわれた母からの独立過程は、吉里吉里国の日本からの独立運動の過程と類似している。両者は、同じような矛盾に陥っているのである。つまり簡単に言えば、母あるいは母国を忘却しようとすればするほど、逆にそれと真っ向から対立しなければならなくなってしまう、ということである。井上ひさし自身は、古橋と母の関係について、こう述べた。

『吉里吉里人』の主人公＝狂言回しの、日本の三文文士の古橋健二氏は、典型的な「母と切れていない子」です。そして母親から分離独立しようと必死です。[11]

『吉里吉里人』の話の中で、古橋は何回も母に受けた精神的な欠損を乗り越えようとしながら母に裏切られている。古橋の母の行動は、わざと息子を損なうのではないが、どの場合にも、性的対象として自分を誇示するのである。古橋からすれば、自分の母が無限に他の男の性的対象としての位置にあるゆえに、母らしさの真髄が性の商品と化することになってしまう。『吉里吉里人』の十四章には、古橋捨が息子健二の新国家吉里吉里国の中心的人物としての評判に乗って、日本側のマスコミの注目を引く場面が描き出されている。NHKのア

ナウンサーは、次の晩の「ビッグショー／古橋捨・日本の女」という番組を提灯持ちしながら、次のように古橋の母を紹介する。

> 古橋捨の一生に、わたしは日本の女性の典型をみる思いがいたします。貧農の末娘として生まれ、親にはうとまれ、男には騙され、子にはそむかれ、いまやたったひとりで死と向い合っている。（中略）古橋捨、日本女性の手本です。[12]

そして、その番組中に古橋捨は昔の芸者としての経験を語りながら、「裾をまくってスツールに腰をおろし、膝を九〇度に開いた。」[13]古橋の母がNHKの視聴者の前で自分の恥部を見せる行動は、息子の観点から見ると、自分の母の一番神秘的な所、あるいは、自分自身の由来が露呈されたことを意味する。つまり、彼女の本質はものとして、または、商品のような形で消費者に向いており、それに古橋は激しい嫌悪を覚えるのである。こうした母の存在はどのように考えられるべきであろうか。このシーンと吉里吉里国立ストリップ劇場のストリッパー、アベ・マリアの吉里吉里国の国旗を産み出す場面を対照的に考えれば、この問題についての参考になるかもしれない。というのは、井上ひさしは新国家造りの成り行きにおける商品化（commodification）をうまく風刺的に示していると考えられるからである。つまり、新国家、あるいは国家になろうとしている共同体は人々の国家意識を深めるため、新しい商品のように、国家の新鮮な魅力を大衆に宣伝しなければならないのである。例えば、南アフリカのボーア人の国家形成にも、このような現象が指摘されている。アン・マックリントックの研究によると、一九三八年のボーア人の国家造り運動に行われた開拓時代のほろ馬車隊復興巡業ツアーは、大衆商品的見世物（mass commodity spectacle）の特性があると指摘されている。ボーア人の国家造り運動の場合には、旧式な格好をしたほろ馬車隊が理想的な役割を務めながら、国家のシンボルとして望ましい国家像を大衆に宣伝するのである。[14] 同様に吉里吉里国のシ

ンボルとしてのアベ・マリアの描写は性欲を通して、国家形成の宣伝的な役割を果たしているのである。要するに、完璧な生娘、あるいは神聖な母の理想のように、国家というものはあくまで想像としてのみ存在するのであるといえよう。そういう風に考える時、他方の古橋の母はどのように捉えたらよいだろうか。古橋の母の魅力に欠けている大衆向きパフォーマンスは象徴的に何を示しているだろう？「日本の女性の典型」でもある古橋の母の、性の商品と化した姿に、古橋は激しい嫌悪を覚えるが、同時にそれは、彼の自立を最も強く妨害する、「古橋健二の唯一の弱味、唯一の恥部」[15]として古橋を引き付ける存在でもある。アベ・マリアの国家のシンボルとしての象徴的な役割と対比すれば、古橋の母は、新独立国家が母国に対して示す、反発と郷愁の両義的反応の象徴としても読みうるだろう。そのような母のパフォーマンスに対して、古橋は反発と嫌悪の方に身を委ね、自分の国籍を離脱して、吉里吉里人と結婚しようとする。つまり、母と過去を忘却しようとするのである。

古橋が母国を捨てて、他国を抱くという極端な行動と丁度反応する形で、吉里吉里国立病院の海外への戦略も、母国に対する反発的な反応として読みうるだろう。しかしながら、両者共（古橋と吉里吉里国）に、その反発的な行動に向かうなかで、自分たちの主体性、あるいは国の中心を失って崩壊してしまうのである。吉里吉里国の将来の最も輝かしい象徴としての吉里吉里国立病院は新しい国家の在り方を目指しながら、母国の日本と同じ道筋を辿ろうとする。即ち、吉里吉里国は最初の自給自足の政策から「世界の至る所へどんどん『侵攻』して」[16]行こうとするのである。そうした「侵攻」という帝国主義的な目論見が露見した時に、吉里吉里国は崩壊することになる。それは、新独立国家としての主体性（あるいは国家意識）が十分に確立されていなかった故の崩壊と言うことが出来るだろう。主人公古橋の描写にも、同じような事態が示されていると言えるだろう。母国と母を捨てようとした古橋は、『吉里吉里人』の最後の方で、爆弾で死に、吉里吉里国立病院で彼の脳味噌を若い美人ベルゴ・セブンティーンの身体に移植される。古橋は「コマーシャルタレント」「新し

い人間」としての吉里吉里国の大統領、つまり吉里吉里国の全面的なシンボルになるが、それは、古橋が彼個人の主体性を完全に失ってしまったことを意味しているのである。「古橋は衝撃を受けた。世界の中心が失われたと感じた。世界を支えていた柱がなくなってしまった。」⑰

新国家の独立への過程には、イッタカキタカ号という双頭の犬に象徴されるように、二元的な意識が同時に存在しているといえよう。母国と同根の文化をもち母国に対する郷愁をもちながら、そういう遺伝質によって自己の国家意識が覆いつくされてしまう危険性があるため、母国の本質とは異なる主体性を構築しなければならない。それ故、新国家のアイデンティティを支える文化の起源への郷愁と自立への欲望が両義的に全く反対方向に向きながら同時に存在しているといえよう。吉里吉里国の場合には、この二元性を統合することができず、結局崩壊してしまうことになるのである。そして古橋も、それと全く同じ軌跡を見せていることは、これまで述べてきた通りである。『吉里吉里人』という作品は、このような二つの類似的な話の絡み合いによって、その全体の構造が支えられていると言うことが出来るのである。

注

①井上ひさし『吉里吉里人』上（新潮文庫、1981）、p.106.

②丸山真男『日本の思想』（岩波書店、1961）、p.175.

③Partha Chatterjee, *The Nation and Its Fragments : Colonial and Postcolonial Histories* (Princeton : Princeton University Press, 1993), p.163.

④『吉里吉里人』上、pp.476-477.

⑤長原豊「国体の身体論的本義：国体の修辞書学あるいは国家という記憶装置」（『現代思想』第24巻9号、1996年8月）、p.132.

⑥『吉里吉里人』上、pp.295-296.

⑦長原豊、p.132.

⑧Elizabeth Grosz, *Volatile Bodies : Toward a Corporeal Feminism* (Bloomington : University of Indiana Press, 1994), p.132.

⑨『吉里吉里人』上、p.300.

⑩Elizabeth Grosz、同上。

⑪井上ひさし・松田修（対談）「『吉里吉里人』を語る」（『国文学解釈と鑑賞』第49巻10号、1984年8月）、p.13.

⑫『吉里吉里人』中、p.344.

⑬『吉里吉里人』中、p.342.

⑭Anne McClintock, *Imperial Leather : Race, Gender and Sexuality in the Colonial Conquest* (New York : Routledge, 1995), p.374.

⑮『吉里吉里人』中、p.348

⑯『吉里吉里人』下、p.456.

⑰『吉里吉里人』下、pp.427-428.

討議要旨

小池正胤氏より、たとえば「吉里吉里」は「きりきり舞い」という言葉を暗示しているわけだが、こういったかたちのユーモア、滑稽が、言葉の上でも、人物設定の上でも細かく配置されているのが井上小説の特徴である、こうした言葉遣いは構成に対する単なる表現手段であるのか、それともテーマそのものに関わるものと考えられるのかとの質問があった。これに対して発表者は、『吉里吉里人』は標準語と東北、宮城北部の方言が並記されるかたちを取っており、言葉の二元性と深い関わりを持っている、また地方意識を表すという点でも、独立というテーマと関わってくると思われると回答された。

また谷川惠一氏より「記憶」の問題について次のような指摘があった。記憶を刷り込まれた日本人が『吉里吉里人』という作品を読むと、どうしても日本の近代史を投影して読んでしまう。しかし、そういう記憶を持たないこれからの読者にとっては、発表者のようにシステマティックな近代国家批判として読めるということがわかり面白かった。さらに、谷川氏から吉里吉里国が東北に設定された意味について質問があり、発表者からは、『吉里吉里人』は日本の明治維新以降の国家形成の鏡像と見ることができるが、その国家、あるいは中央権力の対照的なシンボルが東北であると、シェイクスピアの翻訳において階級の低い人物の言葉が東北弁に訳される例を挙げて回答があった。